

# 第1章 高崎市の概要

## 第1節 自然的・地理的環境

### (1) 位置・面積

高崎市は日本列島のほぼ中央にあり、関東平野の北端、群馬県の中西部に位置している。

東は前橋市、玉村町、西は長野県軽井沢町、安中市、富岡市、甘楽町に接し、南は藤岡市、埼玉県上里町、北は長野原町、東吾妻町、渋川市、榛東村に接している。東京都心部までは約100kmの距離にあり、市役所や高崎駅のある市街地周辺の標高は約97mとなっている。

明治33年（1900）4月に市制を施行し、昭和40年代までに周辺14町村との合併を重ねた。その後、平成18年

（2006）から平成21年（2009）にかけての市町村合併（倉淵村、箕郷町、群馬町、新町、榛名町、吉井町）を経て、面積は459.16km<sup>2</sup>となった。

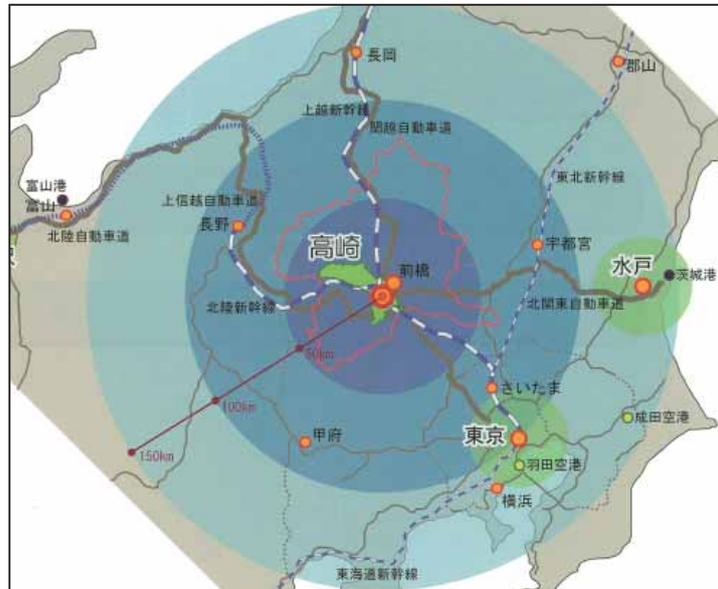


図1-1 高崎市の位置（高崎市都市計画マスタープラン）



図1-2 高崎市と周辺の市町村

## (2) 地形

高崎市は、関東平野が台地から丘陵<sup>きゅうりょう</sup>へと移り変わる地域にあたり、南東部は平坦地形である一方、北西部はゆるやかな丘陵地形や自然豊かな山々に囲まれた山間地形を有し、市域の中でも変化に富んだ自然地形をみることができる。

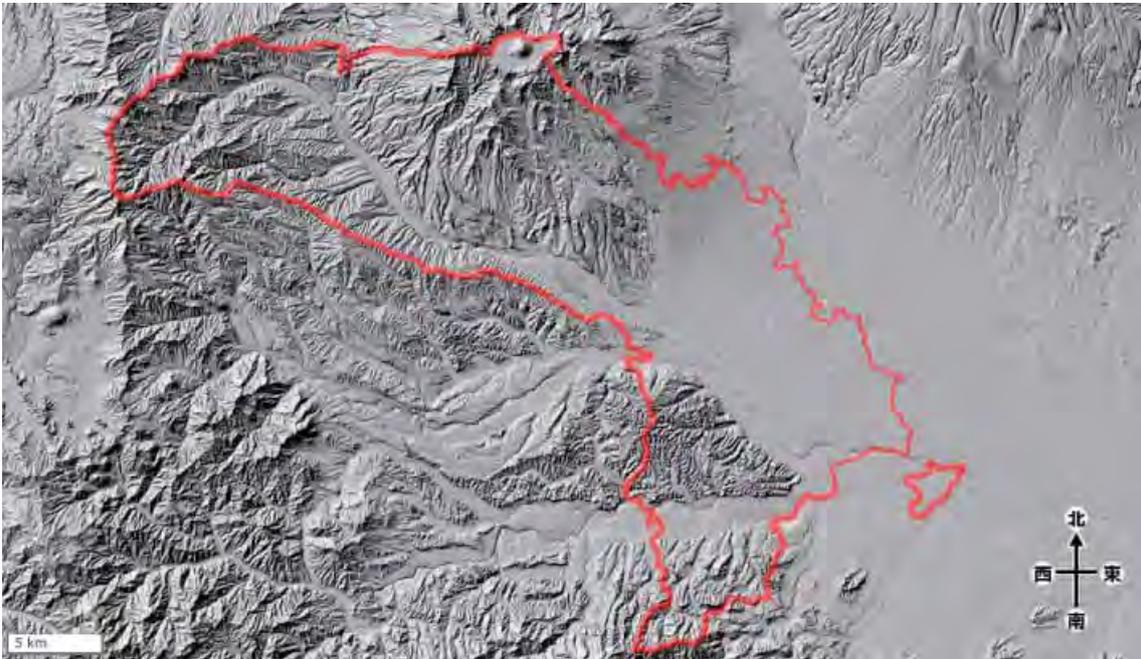


図1-3 高崎市の地形（国土地理院陰影起伏図に加筆）

榛名山の東南斜面に形成された榛名火山麓扇状地は後期更新世(2万～1万5千年前頃)に、榛名山山頂部の一部に形成された溶岩円頂部が崩壊することによる「陣馬岩屑なだれ」により大部分が造られた。その広大な斜面上を土砂等が流れることで凸凹<sup>でこぼこ</sup>が埋められ、さらに6世紀頃の噴火活動により扇状地西端が泥流堆積物で埋められたことで、現在の様な地形が形成されたと考えられている。また、南東方向に流れる幾筋もの中小河川によって浸食を受けており、その谷によって扇端から南の低地へ張り出した、数列の細長く伸びる台地が形成された。

榛名火山麓扇状地を南下すると、緩くなる傾斜から平坦な地形面が続く。この地形面は前橋台地と呼ばれ、東縁は広瀬川、西縁は鳥川<sup>からす</sup>まで連続している台地で赤城山や榛名山などを前縁とする上信越の山地と関東平野の境界にあたる。

前橋台地の中央付近を流れる井野川流域には、段丘と谷底平野からなる井野川低地帯が広がっており、この低地帯を境にして前橋台地の西域は特に高崎台地と呼ばれている。

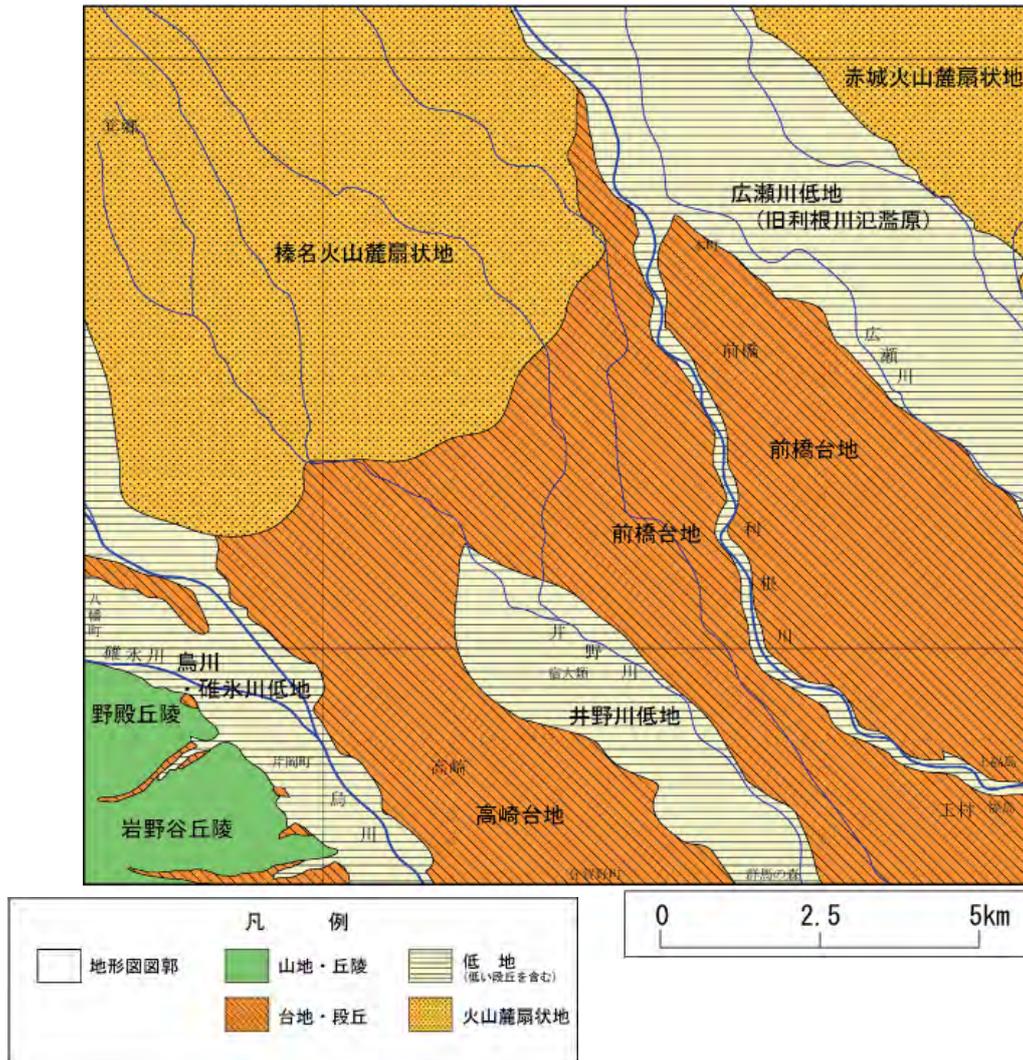


図1-4 地形地域区分図  
 (国土地理院土地条件調査解説書「前橋及び高崎地区」の図に加筆)

①山並み

市の中心街からは北に位置する榛名山をはじめ、北東の中景に赤城山、遠景には谷川連峰を、西の中景に妙義山や荒船山、遠景には浅間山を望むことができる。周囲の山を見上げて自分の位置を把握する習慣がある程、市域を囲む山々の存在は、市民にとって安心感を与えると共に郷土の原風景を形成する上では欠かすことのできないものとなっている。



図1-5 榛名山

榛名山は上毛三山の一つとして市民に親しまれている山であり、標高1,449mの掃部ヶ岳を最高峰に、相馬山(標高1,441m)、榛名富士(標高1,390.3m)、

えぼしだけ  
鳥帽子岳（標高1,363m）、ふたつだけ  
二ツ岳（標高1,343m）等のいくつもの峰からなり、  
底面の直径約2.5kmにおよぶ大型の複成火山である。

## ②丘陵と台地

市役所の所在する市街地の南西部に広がる岩野谷丘陵は観音山丘陵とも呼ばれ、北側を碓氷川、東側を烏川、南側を鑓川に囲まれ、東西約1.5km、南北約7kmあり、北側がやや狭く地図上では台形を呈している。この岩野谷丘陵の北部から東部にかけての一部が市域にあたり「観音山」と親しまれている。尾根の高さが標高200m～250mと定高性がある一方、全体的に河川による開析が進んでいるため、幅の狭い稜線や傾斜が厳しい急崖も多く、起伏に富んだ地形となっている。

高崎地域の西方にある八幡台地は、碓氷川と烏川とに挟まれ、その合流地点に向かって細長く伸びる舌状の台地で、川との比高約30mの急な崖となっている。

吉井地域を蛇行しながら東流する鑓川は、上下二段の河岸段丘を形成している。上位段丘は鑓川河床から比高50m前後である。上位段丘は鑓川右岸でのみ顕著であり、左岸では対応する段丘が認められない。下位段丘は、南北幅1～2kmの緩やかな傾斜を持つ広い段丘面を有し、河床からの比高は10～15mである。



図1-6 高崎市役所から望む「観音山」

## ③河川・用水

市域の東には利根川が流れ、山や丘陵の間に烏川・神流川・鑓川・碓氷川が流れている。また、それらの河川の間には井野川・染谷川・榛名白川、滝川や世界かんがい施設遺産である長野堰用水が流れている。

利根川は、日本最大の流域面積(16,840km<sup>2</sup>)と、日本第2位の長さ(約322km)をもつ一級河川である。群馬県最北端の大水上山に源流を發し、群馬県の中央、高崎市の東を流れている。「坂東太郎」の異名を持つ、日本三大暴れ川の一つに数えられている。

烏川は、群馬・長野の県境にある鼻曲山に源流を發し、榛名山の南麓を南東に流れ、平野部に入ってから碓氷川、鑓川、神流川を合わせて利根川に合流している。流域の約80%は山地になっており、上流の榛名地域では河岸段丘を利用した梨と桃の栽培が盛んである。

碓氷川は、烏川の支流として群馬県と長野県との境界に位置する一ノ字山に源を發し、



図1-7 高崎市役所の西側を流れる烏川

国道18号と並行しながら安中市をへて烏川と合流している。

鍋川は、群馬県と長野県の県境に位置する物見山付近に源流を発して南東へと流下し、国道254号と並行して東へ流れ、高崎市南部で烏川に合流している。

神流川は、群馬県の南西端、上野村にある三国山の北麓に源流を発し、多野山地へ曲がりくねりながら流れ、V字型の谷は急斜面を形成している。

平成28年(2016)に世界かんがい施設遺産に登録された長野堰用水は、古くから水利に乏しい高崎台地に水の恵みをもたらし、この地域の農業用水、生活用水として、また、染色、製粉、製糸などの工業用水としても利用されてきた。現在は、本郷町の長野堰頭首工で烏川から最大毎秒6.8tの水を取水し、榛名白川の下をくぐり、高崎市街地を北西から南東に横切る形で、14箇所の水門で分水しながら、8.6km下流の高崎市立城東小学校の南にある円筒分水堰に向かう。円筒分水堰は、水争いの頻発した長野堰用水下流地域へ受益面積に応じて配水するため昭和37年(1962)に設置された堰である。

滝川は、江戸時代初期に前橋にできた天狗岩用水を玉村まで延長した用水である。京目町・大沢町・萩原町・西横手町・宿横手町・上滝町など、市域の東側付近を流れ、農業用水とともに防火用水としても使われている。

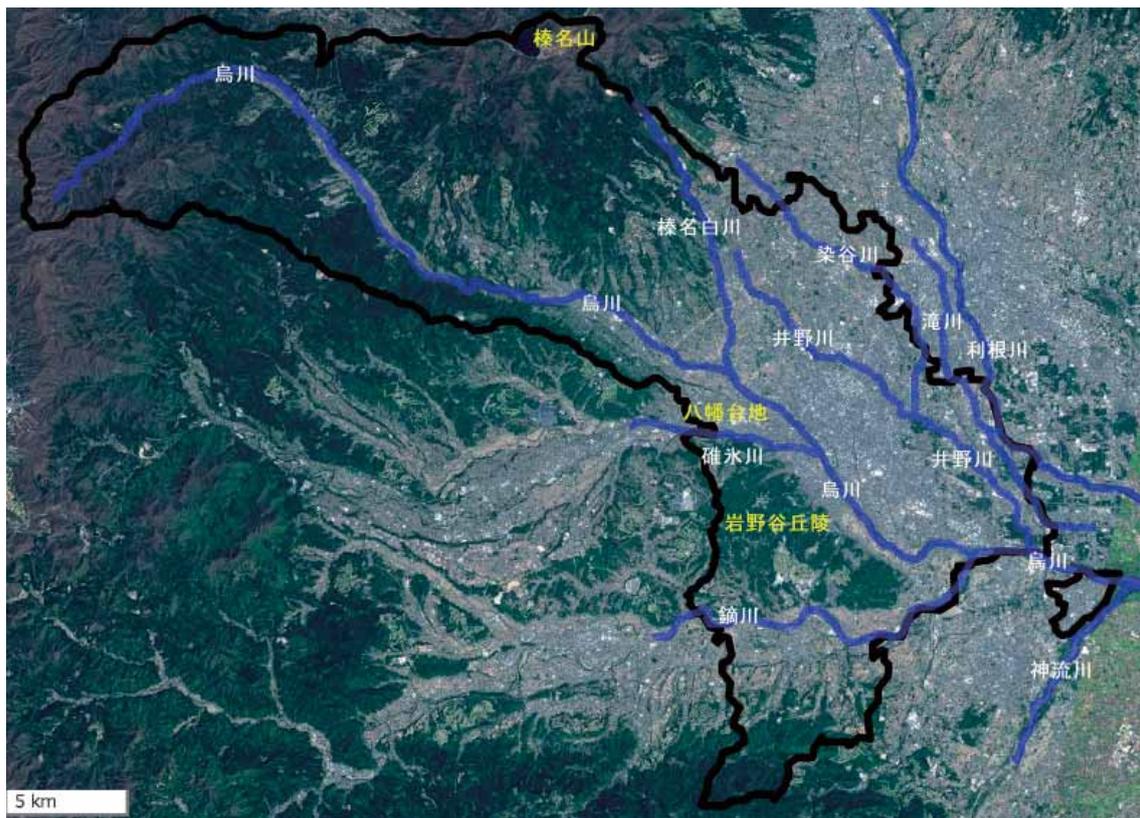


図1-8 主な山や河川の位置 (国土地理院地図 GSI Maps に加筆)

(3) 気候

高崎の市域は広範囲に及び、平野部と北西の山間部では地形や標高の違いにより、気候や気温に多少の差が見られるが、夏と冬、日中と夜間との気温差が大きい内陸性気候ということは共通している（図1-9）。梅雨期と秋雨期以外は年間を通して日照時間に恵まれていることや、夏の雷とともに季節の風物詩としても知られる、北の山々から吹き降ろす冷たく乾燥した「からっ風」が本市の気候の特徴といえる（表1-1）。

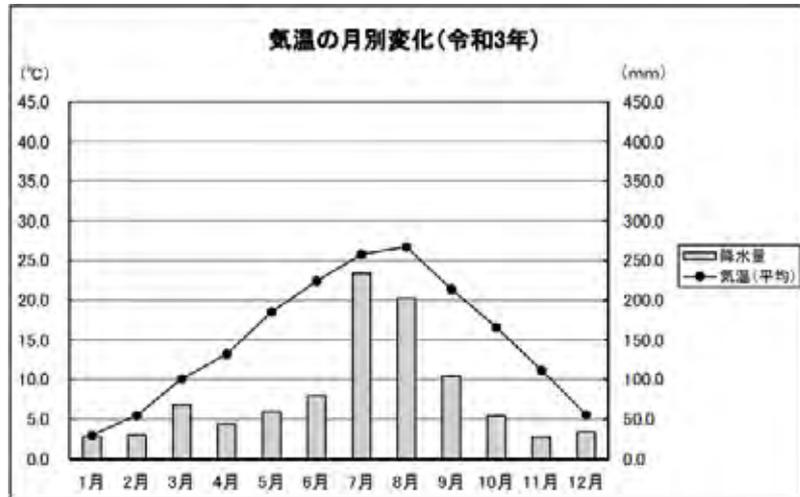


図1-9 月別平均気温と降水量（令和4年版高崎市の統計）

このような気候的特性が本市の伝統工芸品である「高崎だるま®」や、多種にわたる農産物の生産を盛んにしている一因といえる。

表1-1 2017年から2021年の風速データ（気象庁の上里見地点のデータをもとに作成）

	平均風速 (m/s)	最大風速			最大瞬間風速		
		風速 (m/s)	風向	月 / 日	風速 (m/s)	風向	月 / 日
2017年	1.6	8.4	西北西	2月2日	16.7	西	10月23日
2018年	1.5	8.5	西北西	3月1日	16.3	西北西	2月17日
2019年	1.5	9.3	西北西	12月31日	17.2	西北西	12月31日
2020年	1.4	10.6	西北西	4月2日	17.8	西北西	4月2日
2021年	1.6	9	西北西	12月17日	19.3	北西	3月26日

(4) 植生、生態系

平野部から山間部までである本市では、地形や標高の違いにより、気候や気温に多少差が見られ、多種多様な植生・生態系がみられる。

①植生、植物

榛名山には標高に従いススキ、クレーミズナラ、クヌギコナラ、スギ・ヒノキやカラマツの植林など多様な植生が広がり、ハルナユキザサやジョウショウカモメヅル、ミヤマフナバラソウ、沼ノ原のカシワ林の分布などが確認できる。榛名神社域には、アズマシャクナゲやキヨスミコケシノブが生育している。倉渕地域にはカラマツ、スギ・ヒノキ、アカマツの植林、クレーミズナラの群落、シオジ原生林がみられる。また、ヒカリゴケの群

落やヒメスミレサイシンの生育も確認することができる。

岩野谷丘陵（観音山丘陵）には、丘陵の尾根にアカマツ、溪谷沿いにはスギ・ヒノキなどがみられ、低木層にはコナラ、フジなど、草木層にはジャノヒゲ、ミズヒキなどがうっそうとした林床を形成し、豊かな自然は野鳥の宝庫となっている。岩鼻火薬製造所の跡地にある「群馬の森」にはシラカシ、クヌギ、エノキ、アカマツが生育し、東側にはクヌギ、コナラなどがあり、野鳥の棲みかとなっている。

市域の平野部は水田が広がり、北東方面には桑畑、西方の丘陵にはアカマツの植林やクヌギ・コナラ群集が見られる。また、市内には多くのため池が点在し、吉井地域ではヒシ群落、クロモ群落、アオウキクサータヌキモ群集など、水生植物群落をみることができる。

## ②動物

『群馬県の貴重な自然 動物編（平成2年3月発行）』には、高崎に分布する貴重な動物が紹介されている。カワセミやヒゲナガカワトビケラ、ヘビトンボやナミウズムシなど、平野部や山間部など地域を問わずに分布しているものもあれば、榛名地域のアサマジミや倉淵地域のイヌワシ、カジカ、カモシカやヤマネ、群馬地域のタカチホヘビ、新町地域や吉井地域のヤリタナゴなど、地域特有の動物の分布も確認できる。山間部には国指定天然記念物であるニホンカモシカが、倉淵地域の<sup>ささどややま</sup>笹峠山の洞穴には県指定天然記念物のウサギコウモリが生息している。

岩野谷丘陵（観音山丘陵）は90種類もの野鳥の宝庫として知られ、アオサギやダイサギ、トビ、オオタカ、ノスリやキジ、カワセミやマカゲラやイカル、オオルリなど、季節によっても異なる野鳥が確認できる。



図1-10 高崎市の木・花・鳥

## (5) 景観

高崎駅周辺の都心地域は高崎城の城下町として形成され、中山道の宿場町として発達した。その後も鉄道路線網の結節点、経済の中核として発展を続け、市の玄関口及び群馬県の「商都」としてにぎわいのある景観が形成されてきた。高崎地域東部では広大な田園を井野川や滝川が縦断し、養蚕農家住宅や屋敷林など、昔ながらの田園集落景観を見ることができる。

高崎地域北部は都心地域に接する東側は住居地域、西側は市街化調整区域となっており、国道17号や環状線に沿って商業・業務施設が集積している。高崎地域西部の南側では岩野谷丘陵（観音山丘陵）から鼻高の少林山達磨寺へと連なる緑あふれる山並み、そして丘

陵の緑と一体となった碓氷川の水辺景観が見られる。高崎地域南部では中山道に沿ってかつての宿場町の面影が残り、脇本陣や閻魔堂のほか由緒ある寺社も多く、歴史的なまちなみを見ることができる。

倉淵地域は烏川と山々を中心とした水と緑の豊かな自然環境を持つ地域である。

榛名地域の榛名富士や榛名湖周辺では、四季折々に変化する雄大な自然的景観が見られる。

箕郷地域は高低差が大きく地形の変化に富んでおり、榛名山や赤城山などの眺望に加え、市街地への見晴らしや夜景の美しい眺望点、<sup>みのわじょう</sup>箕郷梅林や箕輪城跡など、良好な視点場を有している。

群馬地域は比較的平坦な地形であり、榛名山や赤城山の雄大な山並みを背景に、地域の特産品である国府白菜などの畑や水田が広がっている。

新町地域の烏川や温井川、神流川の河川敷を利用した運動公園や土手からは、山並みと水辺が一体となった雄大な景観が広がっている。

吉井地域は南と北を山地や丘陵部で挟まれ、中央を流れる鐺川沿いの田園地帯を貫くように上信電鉄・上信越自動車道・国道254号が走り、電車や車から見える田園と背後にそびえる山並みが調和した里山風景が代表的な景観となっている。



図1-11 箕輪城跡から望む高崎市街

## 第2節 社会的環境

### (1) 人口動態

#### ①高崎市の人口推移

国立社会保障・人口問題研究所（社人研）が令和5年（2023）に公表した推計によると、本市の人口は年々減少を続け、令和22年（2040）には294,836人となり、今後20年間で約37,000人減少すると見込まれている（図1-12）。しかし、総人口は、令和6年（2024）3月末時点で366,547人であり、減少傾向へと転じているものの、全国的に急速する人口減少社会において例外的に健闘しているといえる。

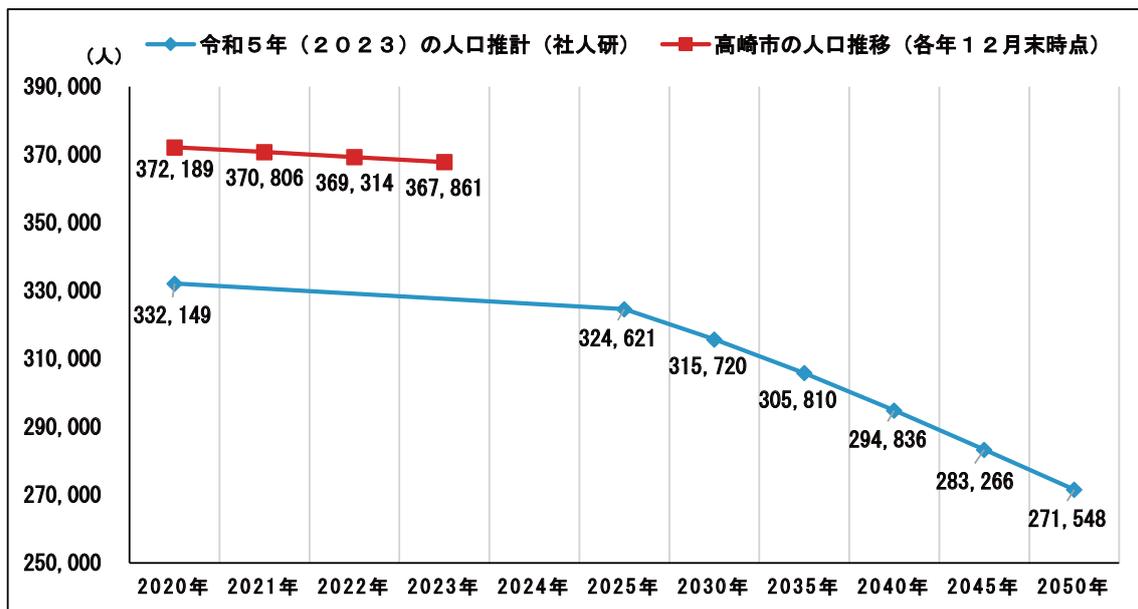


図1-12 人口推移と令和5年（2023）の社人研による人口推計

#### ②人口動態の推移

##### a. 自然増減

出生数と死亡数により変動する「自然増減」について、平成22年（2010）に死亡数が出生数を上回る「自然減」へと転じ、令和4年度（2022）には、自然増減数は2,160人減となっている（図1-13）。

今後、一般的には少子高齢化による人口減少社会が続くことから、さらに自然減は進むことが見込まれる。

##### b. 社会増減

転入者と転出者の差を表す「社会増減」については、おおむね転入者が転出者を上回る「社会増」の状態が続いている（図1-14）。令和4年（2022）には、転入者が13,379人に対して転出者が12,820人となり、転入者が転出者を559人上回った。

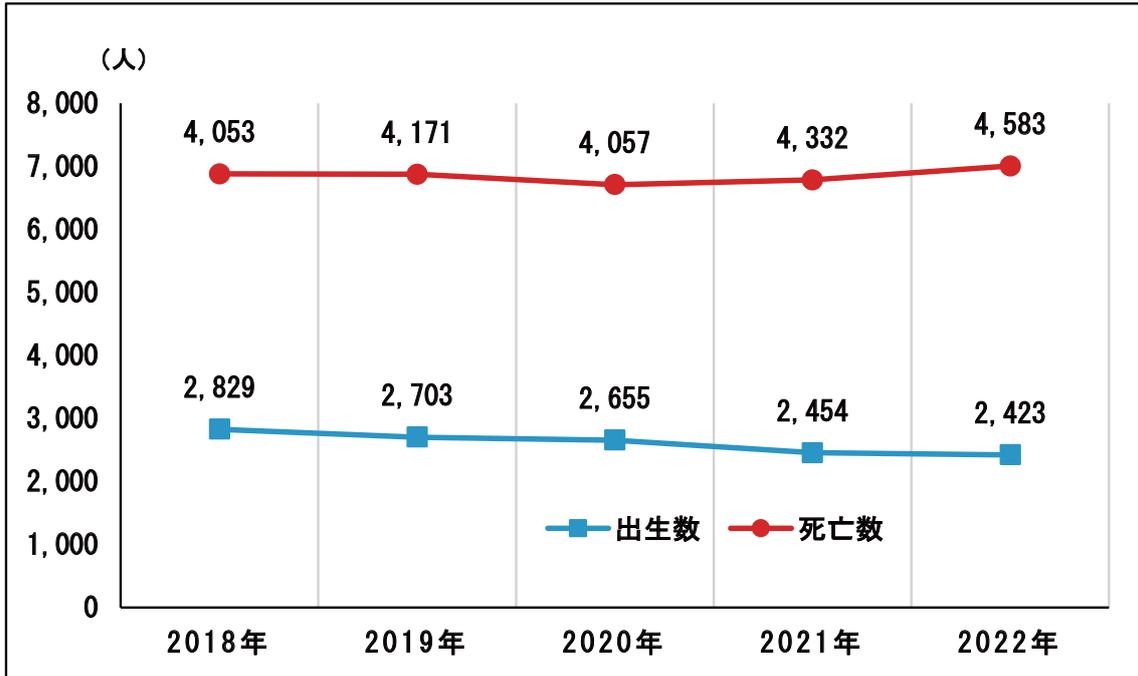


図1-13 出生数・死亡数の推移（令和4年版高崎市の統計をもとに作成）

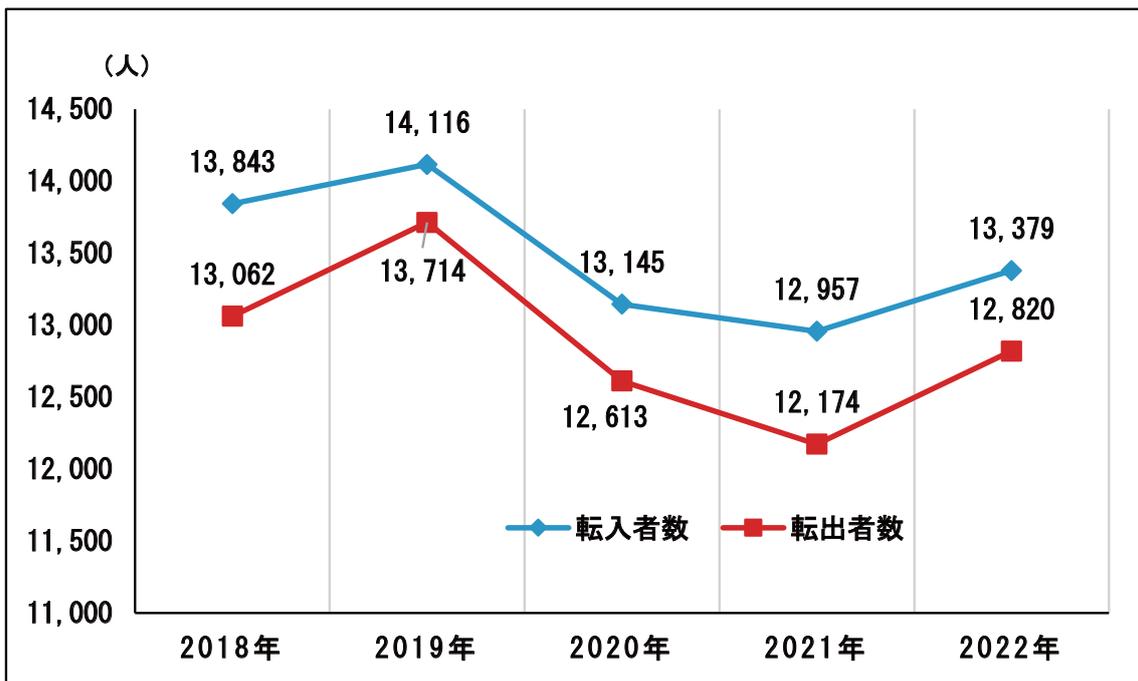


図1-14 転入者数・転出者数の推移（令和4年版高崎市の統計をもとに作成）

c. 年齢3区分別人口

総人口を年少人口（0歳から14歳）・生産年齢人口（15歳から64歳）・老年人口（65歳以上）の三つに分けた「年齢3区分別人口」を、平成27年（2015）と令和2年（2020）で比較すると、年少人口は49,298人から46,009人に減少、生産年齢人口も221,228人から215,425人に減少しているのに対し、老年人口は

97,466人から105,034人に増加し、老年人口は初めて10万人を超えた（図1-15）。

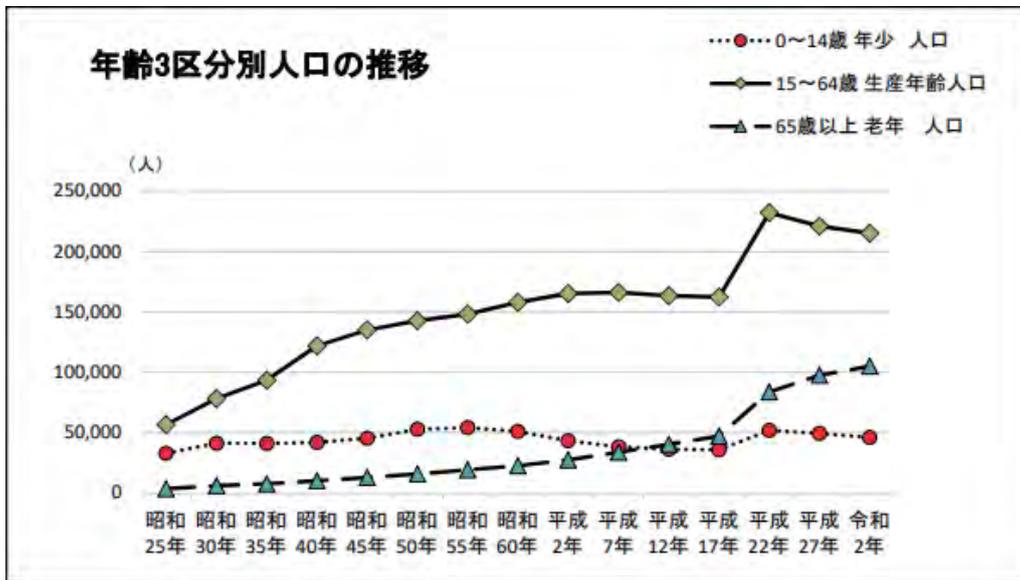


図1-15 年齢3区分別人口の推移（令和4年版高崎市の統計）

c. 各地域における人口

令和2年の国勢調査からみる、平成27年（2015）と令和2年（2020）の地域別の人口を比較すると、高崎地域と群馬地域は増加、箕郷地域と新町地域がほぼ横ばいに対し、倉渕地域と榛名地域、吉井地域は減少傾向にある（図1-16）。

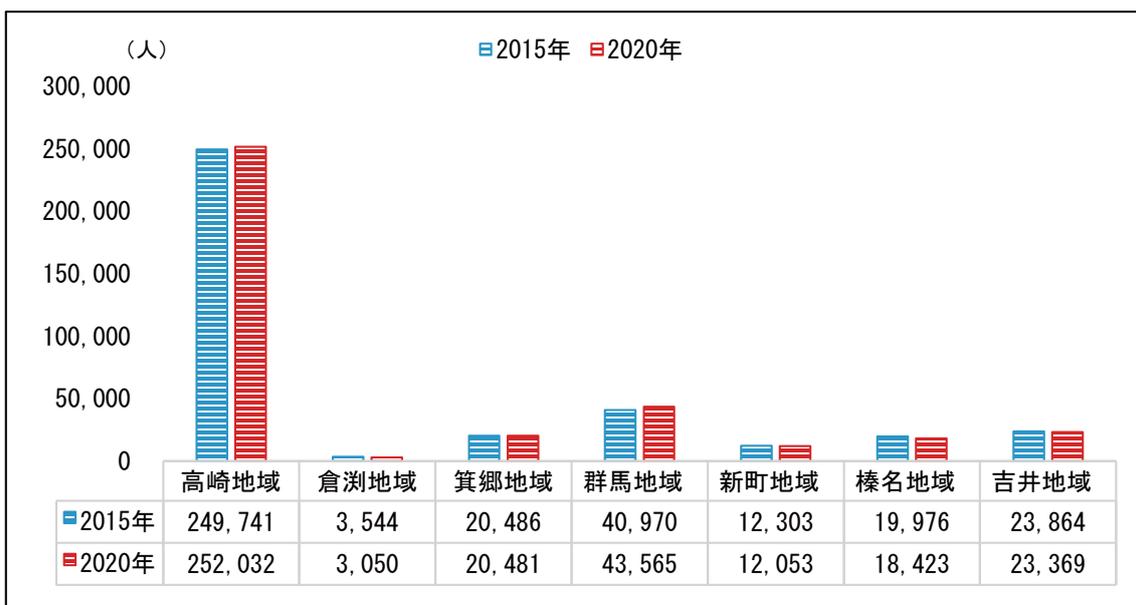


図1-16 各地域の人口（令和2年国勢調査の概要をもとに作成）

## (2) 自治体の沿革

高崎は政治・軍事において重要な地であり、箕輪城主の井伊直政が高崎城を築いた後は江戸時代を通じて中山道随一の町として発展した。

明治5年(1872)に大区小区制が、明治11年(1878)には郡区町村編成法が制定され、明治政府による地方制度の近代化が進められた。当時編成された町名や村名には、現代の<sup>おおあざ</sup>大字や町名に通じる名称をみることができる(表1-2)。

明治21年(1888)に町村制が公布されると、翌年4月に下和田村、下並榎村、赤坂村及び飯塚村の一部と合併し高崎町となった。町役場を宮元町に置き、初代町長には矢島八郎が就任した。

明治33年(1900)4月1日、市制施行により高崎市が誕生した。初代市長には再び矢島八郎が就任し、その後の高崎の発展に大きく貢献した。

大正時代に入り、高崎を近代化・大都市化へと発展させる機運が高まると、昭和2年(1927)4月1日に群馬郡塚沢村・片岡村と合併、次いで昭和14年(1939)10月1日に群馬郡佐野村、市制50周年となる昭和26年(1951)4月1日には群馬郡六郷村と合併した。

昭和28年(1953)の町村合併促進法により全国的に昭和の大合併が進むなか、高崎市も昭和30年(1955)1月20日に群馬郡新高尾村の一部、中川村、碓氷郡八幡村・豊岡村、同年8月1日に群馬郡長野村、翌年9月30日に多野郡八幡村、群馬郡大類村の一部との合併を進めた。昭和32年(1957)8月1日に岩鼻村の一部と、昭和38年(1963)3月31日に倉賀野町と合併すると、高崎市東部の工業化により発展したことを背景に昭和40年(1965)に群南村と合併し、大都市高崎への発展を着実に進めた。

平成11年(1999)の合併特例法によって、全国各地で平成の大合併が起こった。平成15年(2003)に高崎地域任意合併協議会を設置し、住民説明会や住民意識調査の実施、法定合併協議会の設置や周辺町村との合併協議を積極的に進めていった。その結果、平成18年(2006)1月23日に倉渕村・箕郷町・群馬町・新町と、同年10月1日に榛名町と合併した。平成21年(2009)6月1日には吉井町と合併し、人口は37万人を超えた。中核市指定要件を満たし、平成23年(2011)4月1日には保健衛生や教育、福祉等に関する事務権限を強化された中核市となり、現在の高崎市へと至っている。

表1-2 高崎の大区・小区制導入時（明治5年）の編入町村名

大区名	小区名	町村等名	大区名	小区名	町村等名
北第2	第5	広馬場村 柏木沢村	北第10	第1	西明屋村 上芝村 矢原村 東明屋村 金敷平村 松之沢村
	第6	野良犬村 金子(古)宿 足門村 中里村 井出村		第2	生原村 保渡田村 行力村
	第7	引間村 後引間村 冷水村 北原村 西国分村 東国分村 塚田村		第3	浜川村 南新波村 北新波村 楽間村
	第8	棟高村 菅谷村 福島村 中泉村 三ツ寺村		第4	西新波村 我峰村 下小埞村 上小埞村 菊地村
	第9	大八木村 上小島村 筑縄村		第5	和田山村 白川村 本郷村 下芝村
北第4	第1	川曲村 稲荷新田村 上京目村 中京目村 下京目村 大沢村		第6	高浜村 白岩村 富岡村 善地村 十文字村
	第2	前箱田村 箱田村 後家村 江田村 新保田中村		第7	下室田村 神戸村 三ツ子沢村 宮沢村
	第4	上新田村 下新田村 萩原村		第8	中室田村 上室田村 春名山村
	第5	島野村 矢島村 西島村		第9	権田村 三ノ倉村 水沼村 岩氷村 川浦村
	第6	南大類村 宿大類村 元島名村		北第11	第1
	第7	新保村 上大類村	第2		藤塚村 剣崎村 八幡村
	第8	日高村 井野村 小八木村	第3		板鼻宿 若田村
	第9	貝澤村 濱尻村	第4		金井洲村 町谷村 下大島村 上大島村
	第10	正観寺村 中尾村 鳥羽村 稲荷台村	第5		鼻高村 大谷村 岩井村 中宿村
	北第5	第1	高松町 柳川町 堰代町 宮本町 椿町 明石町 弓町 竜見町 十人町 北通町 真町 山田町		第9
第2		新喜町 南町 鎌倉町 新田町 新ラ町 下横町 職人町 砂賀町 檜物町 鍛冶町 若松町	第1		小幡村 轟村 上野村 小川村
第3		連雀町 鞆町 通町 田町 中紺屋町 寄合町 白銀町 本紺屋町 八軒町 羅漢町 九蔵町 新紺屋町 高砂町	第2		福島町 田篠村
第4		本町 嘉多町 赤坂町 常盤町 歌川町 四ツ屋町 相生町 住吉町	第3		白倉村
第5		赤坂村 上並榎村 下並榎村	第4		天引村 金井村
第6		上飯塚 下飯塚	第5	長根村 下長根村	
第7		江木村 高関村	第6	多胡村 高村 神保村 塩村 東谷村 大沢村	
第8		上中居村 下中居村	第7	池村 塩川村 吉井町 河内村	
第9		岩押村 新後閑村 下和田村 和田多中村	第8	多比良村 矢田村	
第10		上佐野村 下佐野村 佐野窪村 下ノ城村	第9	片山村 本郷村 小棚村	
第11		倉賀野宿 同出作	第10	後賀村 白岩村 庭谷村 造石村	
第12		乗附村	第11	藤木村 桑原村 小桑原村 相野田村	
第13		石原村	北第14	第1	上大塚村 西平井村
第14		寺尾村		第2	中大塚村 緑野村
北第6	第1	西横手村 宿横手村 中島村 上滝村 滝新田村		第3	下大塚村 本動堂村 篠塚村
	第2	板井村 中斎田村 斎田村		第4	上落合村 白石村 三ツ木村
	第3	綿貫村 下滝村 滝村		第5	木部村 山名村
	第4	下大類村 中大類村		第6	阿久津村 根小屋村
	第5	柴崎村 矢中村		第7	岩井村 小暮村 馬庭村
	第6	岩鼻村 台新田村 栗崎村 中里村		第8	岩崎村 下奥平村
	第7	八幡原村 下斎田村 宇貫村		第9	上奥平村 坂口村 蔵村
北第13	第1	西明屋村 上芝村 矢原村 東明屋村 金敷平村 松之沢村		第10	小串村 石神村 中島村 深沢村 黒熊村
	第2	生原村 保渡田村 行力村		第11	東平井村 鮎川村 三本木村 高山村
	第3	浜川村 南新波村 北新波村 楽間村		第12	金井村 下日野村 上日野村
	第4	西新波村 我峰村 下小埞村 上小埞村 菊地村	北第15	第1	新町駅 立石新田 立石村 中島村
	第5	和田山村 白川村 本郷村 下芝村			
	第6	高浜村 白岩村 富岡村 善地村 十文字村			
	第7	下室田村 神戸村 三ツ子沢村 宮沢村			
	第8	中室田村 上室田村 春名山村			
	第9	権田村 三ノ倉村 水沼村 岩氷村 川浦村			

※注：小区にみる町村等名には、現在の高崎市以外の名称も含まれる。

### (3) 産業

市の就業人口は、約18万1,000人（令和2年）であり、これらの人々が従事している産業と産業別就業者の割合は、農業・林業などの第1次産業が3%、製造業などの工業や建設業などの第2次産業が28%、商業や情報通信、医療福祉などサービス業などの第3次産業が69%となっている（図1-17）。もともと、商業都市として発展した高崎市では、近年も第3次産業の増加が目立ち、第2次産業と合わせると97%となる一方、第1次産業は就業者が少なく、後継者不足が課題となっている。

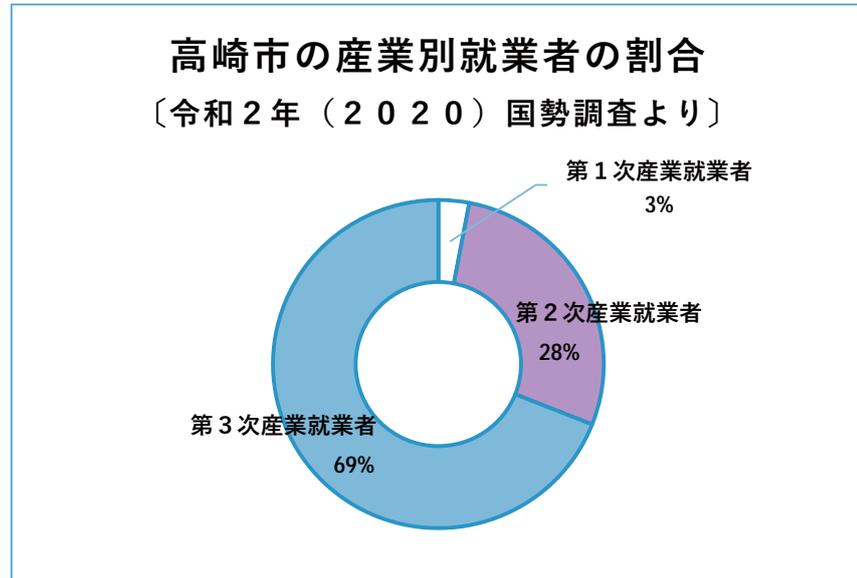


図1-17 産業別就業者の割合

#### ①農業

日照時間が長く、豊かな自然に恵まれた高崎では、各地域で特色ある農業が営まれている。高崎地域や新町地域、群馬地域では米や小麦、ハクサイやニンジンなどの栽培が中心となっており、特に小麦は古くから粉食文化に使われ、焼きまんじゅうや高崎うどん、高崎パスタは魅力のご当地グルメとなっている。榛名地域や箕郷地域では、果樹栽培がさかんである。本市のウメの生産量は東日本1位を誇り、榛名地域のフルーツ団地ではナシやモモなどの栽培に力を入れている。倉淵地域では米や野菜の有機栽培がさかんであり、吉井地域では、ナス、キュウリのほか、シイタケをはじめとするキノコ類の栽培など、多様な農業が営まれている。

首都圏へのアクセスが良好なことから、多彩な農産物を地元で消費する「地産地消」と、大消費地へ販売する「地産他消」の両方を兼ね揃えた「地産多消」を推進している。

#### ②工業

本市は、北関東工業地域の一角にあり、景気などの社会変動に左右されることのない産業構造や産業技術、情報・人材を活用して活力ある工業の振興を目指している。

市の製造品出荷額等は令和2年（2020）では9,519億4,066万円となり、産業別にみると、化学、食料品、金属製品、はん用機器、生産用機器の順になっている（図1-18）。事業所数では金属製品が最も多く、次いで生産用機器、食料品、電気機器、輸送機器の順になっている。一方、従業者数では食料品、金属製品、はん用機器、生産用機器、電子部品となっている。

本市の工業は、高崎地域、群馬地域を中心に広く分布している。そのうち倉賀野、滝川、京ヶ島、八幡、中川、群馬、岩鼻などの地区は特に工業が盛んで、これらの地域には大規模な工業団地が造成され、多くの工場がある。製造品出荷額においては、工業団地が市全体の58%を占め、飲料・飼料、ゴム製品などの軽工業製品、電子部品、鉄鋼、輸送機器などの重工業製品は、工業団地で生産する比率が高くなっている。また、交通拠点性を生かした企業誘致を進め、幅広い分野で優秀な企業が多く、特に食品分野の企業が集積している。

「高崎だるま<sup>®</sup>」は、二百有余年の歴史をもつ伝統工芸品である。平成5年（1993）には群馬県ふるさと伝統工芸品に指定され、平成18年（2006）には特許庁が創設した地域団体商標制度で、県内初となる商標登録を受けた。

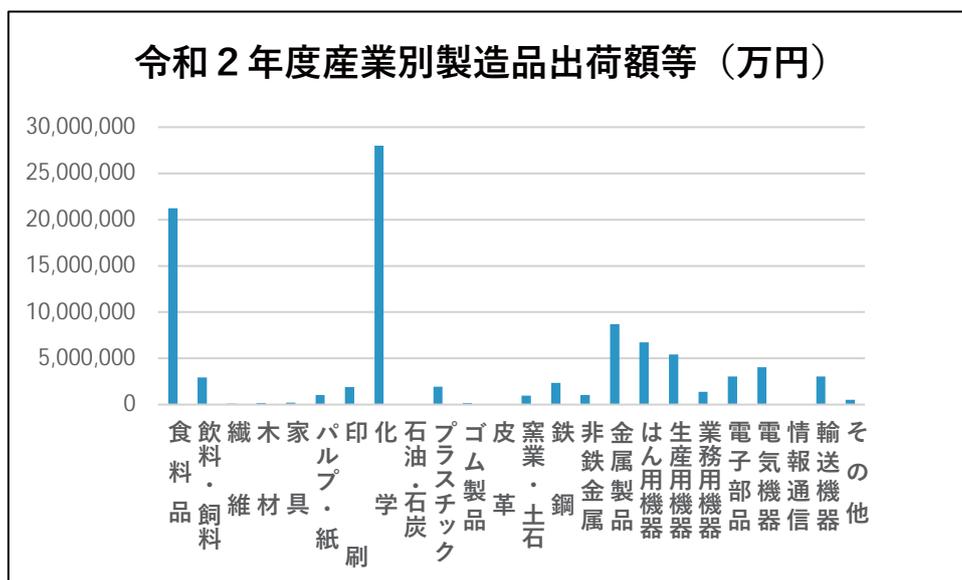


図1-18 産業別製造品出荷額（令和2年度）

### ③商業

江戸時代以降、高崎は高崎城の城下町を基盤に、生糸などの交易が活発な商都として発展してきた。バブル経済の崩壊以降、商店数・販売額とも減少傾向にあった状況の中でも、本市では商業の活性化を図ってきた。市や中心商店街の人々が協力して高崎駅前の再開発、高崎人情市、音楽・文化のイベントを行い、商業のまち高崎に新たな賑わいを創り出している。

平成20年（2008）には「高崎中心市街地活性化基本計画」が策定され、商都高崎ならではの新しいまちづくりが始まっている。また、平成18年（2006）以降は市町村合併が行われたこともあって、市全体の年間商品販売額は増加傾向になり、平成26年度には2兆6,900億6,181万円で、全国14位であった。また、全国に先駆けて問屋団地である高崎卸売商業団地ができ、平成26年（2014）には高崎問屋町駅前に商業業務の拠点施設「ビッグキューブ」が建設されるなど、先進的な流通都市として栄えている。

## ④観光

本市には榛名湖や榛名神社、<sup>こうずけさんび</sup>上野三碑や<sup>ほどた</sup>保渡田古墳群、観音山ファミリーパークや群馬の森など、自然や歴史文化、スポーツ・レクリエーションを楽しめる観光施設がある他、榛名山ヒルクライム in 高崎（ハルヒル）、高崎まつりや高崎だるま市など幅広いイベントがある。また、全国一（38台）の江戸型の山車保有数を誇り、多数の山車が出場し巡業する高崎山車まつりは、その規模、内容において関東一といえる。さらに、高崎パスタや焼きまんじゅうなど、高崎の粉食文化がテレビなどのメディアで紹介されたことで知名度が高まり、ご当地グルメとして人気となっている。



図1-19 高崎山車まつり

## (4) 土地利用

高崎市は合併によって広大な山林・緑地を有することになり、その市域の半分以上が農地と山林で占められている。高崎駅を中心とした中心市街地には、商業・業務をはじめとし、観光・コンベンション、文化芸術、医療・福祉などが集積して、広域交流拠点となっている。

高崎地域の郊外や群馬地域を中心とする平野部では、米や麦、その他野菜などの大規模な農業がみられる。一方で、平野部は住宅開発や工業立地などの開発動向が強く、郊外に小規模住宅地や店舗などが立地する状態が進んでいる。

30年前に市内に約8,600haあった経営耕地は、20年間で約4,500haにまで減少し、現在は約3,000haとなっている。また、農地の耕作放棄も発生し、30年前は約150haであった耕地放棄地が、その後20年間で約1,600haまで増加している。倉渕地域を中心とする山林の近いエリアでは、昔と変わらない豊かな田園風景が広がる地帯もある。一方で、過疎化が進み、空き家や耕作放棄、森林荒廃などの状況もみられる。

## (5) 交通

高崎市には、多くの鉄道や幹線道路が通り、北関東の交通の要衝としてのはたらきをしている。



図1-20 高崎の交通網

### ①鉄道

本市を通る鉄道はJR高崎線・信越本線・両毛線・上越線・吾妻線・八高線、上信電鉄があり、通勤・通学などに大きな役割を果たしている。また、昭和57年（1982）に上越新幹線が、平成9年（1997）に北陸新幹線の高崎・長野間が長野新幹線の愛称で開通したことにより、東京を中心とした各都市への所要時間が大幅に短縮したため、高崎駅を利用する都心への通勤・通学者が大幅に増加している。さらに、北陸新幹線が平成27年（2015）には金沢、令和6年（2024）には敦賀まで延伸したことで、日本海側との観光交流も期待される。

### ②道路交通

#### a. 自家用車

群馬県は「自動車王国」といわれ、自家用車が市民の重要な交通手段となっている。市街地での混雑を解消するため、市街地周辺を通る高崎環状線が平成7年（1995）に全線開通した。また、平成20年（2008）に和田橋交差点が立体交差化され、平成23年度（2011）には高崎渋川線バイパスが国道17号と繋がったことで、国道や県道の慢性的な渋滞や混雑の解消が進んでいる。さらに、高崎駅東口を起点に高崎、伊勢崎、

太田、館林の各都市を一直線に結び、板倉町に至る総延長58.6kmの東毛広域幹線道路（国道354号バイパス）が平成26年（2014）に全線開通した。

高速自動車道の利用も盛んである。昭和55年（1980）7月に関越自動車道の前橋IC以南が開通し、高崎ICが開業した。平成5年（1993）には上信越自動車道の藤岡IC・佐久IC間が開通し、その間にある吉井ICが開業した。また、高崎JCTを起点とする北関東自動車道の高崎JCT・伊勢崎IC間が平成13年（2001）に開通した。さらに、平成26年（2014）2月に関越自動車道高崎JCTと藤岡JCTの間に高崎玉村スマートICが開業した。

#### b. 公共交通機関（バス）

平成9年（1997）に市民の移動手段として高崎市内循環バス「ぐるりん」の運行がスタートし、各地域の路線が高齢者や学生など市民の移動手段として活用されている。

また、「高崎アリーナシャトル」や「上野三碑めぐりバス」など、歴史文化資産の見学や施設等の利用の活性化を促す路線や、「よしいバス」や「はるバス」といった、合併前から運行していた路線が現在でも利用されている。さらに、前橋高崎線や伊香保榛名湖線、高崎渋川線や権田菰生線、前橋玉村線など、高崎市外にアクセスできる路線もあり、市民はもちろんのこと、市外・県外の人にも多く利用されている。

### （6）歴史文化資産に関連する展示公開施設

#### ①市立の主な展示公開施設

市内には、六つの歴史系の博物館や資料館（通称：6館）や、美術館・記念館などの展示公開施設がある。概要は下表のとおりである。

表1-3 市立の主な展示公開施設

館名（所在地）	概要
高崎市歴史民俗資料館（上滝町1058） 	旧群南村役場の建物を転用した資料館で、高崎市内を中心にした民俗資料、特に近世・近代史に関連する資料等を収集・保存・研究・展示している。また、小学生の団体受け入れにも力を入れている。建物は令和2年（2020）8月に国登録有形文化財になった。
観音塚考古資料館（八幡町800-144） 	近隣する観音塚古墳（国史跡）のガイダンス施設として機能している。国指定重要文化財である上野国八幡観音塚古墳出土品をはじめとして、観音塚古墳の横穴式石室から発見された300点にも及ぶ遺物を保存・展示している。

館名（所在地）	概要
<p>かみつけの里博物館（井出町1514）</p> 	<p>ほじた 保渡田古墳群（国史跡）から出土した埴輪などの遺物を保存・展示するとともに、みつでら 三ツ寺I遺跡やきたやつ 北谷遺跡（国史跡）など関連する遺跡の資料や渡来系遺物を展示している。通常の企画展のほか子供向けの企画展を開催、小中学校の校外学習の受け入れを行っている。</p>
<p>榛名歴史民俗資料館（榛名山町138-1）</p> 	<p>榛名神社（国重文）の宝物をはじめ、榛名地域の歴史、民俗資料の収集・保存・展示をしている。平成29年度（2017）から高崎市内の小学生が参加する林間学校の現地学習に利用されている。また、地元各種団体との連携も図っている。</p>
<p>吉井郷土資料館（吉井町吉井285）</p> 	<p>吉井藩関係、吉井火打金関係の資料、吉井地域に関する地質・考古資料や民俗資料を保存・展示している。また、開館以来の歴史を持つ「吉井郷土資料館友の会」が館運営に協力している。</p>
<p>多胡碑記念館（吉井町池1085）</p> 	<p>こうずけさんび 上野三碑（国特別史跡、ユネスコ「世界の記憶」）のガイダンス施設として、古代多胡郡をしのぼせる考古資料や上野三碑の各複製品、多胡碑の碑文の書風に関わる中国の刻石の拓本の展示、上野国多胡郡正倉跡の発掘資料の展示を行っている。企画展や体験事業を実施し上野三碑の普及に努め、上野三碑ボランティア会が解説や環境美化活動などを通して館の活動を支えている。</p>
<p>染料植物園（寺尾町2302-11）</p> 	<p>古くから伝えられてきた日本の染織文化やその魅力を多くの人々に伝えるために造られた植物染色のテーマパーク。園内には染料植物の道をメインに、昔から衣服などを染める原料に使われてきた代表的な染料植物が、たくさん植えられている。</p>

館名（所在地）	概要
<p>高崎市美術館（八島町110-27）</p> 	<p>市民の要望に応え、高崎の芸術文化の主要施設となるべく、平成3年（1991）7月に開館。市民の貴重な文化資産である収蔵作品の展示とともに、各種の特別企画展・鑑賞会などの事業を行っている。また、高崎市美術館が所管する旧井上房一郎邸は美術館に隣接し、平成22年（2010）2月に高崎市景観重要建造物第1号に指定され、同年4月から一般公開している。</p>
<p>高崎市タワー美術館（栄町3-23）</p> 	<p>日本画を中心に展示する美術館として、平成13年（2001）11月に開館。横山大観や平山郁夫など、近現代の日本画家の作品を収蔵し、企画展・収蔵作品展など、日本画を幅広く紹介するために年間5回の展覧会を開催し、あわせて展示解説や講演会などの関連事業を行っている。</p>
<p>高崎市山田かまち美術館（片岡町3-23-5）</p> 	<p>平成26年（2014）4月に開館した。昭和35年（1960）に生まれ、17歳で夭折した山田かまちの水彩画・クレヨン画・詩文など120点を展示し、永遠の少年・山田かまちの魅力を紹介している。</p>
<p>村上鬼城記念館（並榎町288-4）</p> 	<p>村上鬼城<small>きじょう</small>記念館は、「鬼城草庵」と「記念館」の2棟の総称。「鬼城草庵」の1階の和室や2階の書斎には、鬼城が愛用していた文机や硯、火鉢などを当時のまま展示している。「記念館」は自筆の俳句と俳画が書かれた掛け軸や屏風、色紙、自筆句集などを展示し、2階は句会室としての利用もできる。</p>

②県立の主な展示公開施設

市内には、群馬県立の歴史文化資産に関連する展示公開施設がある。概要は下表のとおりである。

表1-4 県立の主な展示公開施設

館名（所在地）	概要
<p>群馬県立歴史博物館（綿貫町992-1）</p> 	<p>国宝である「群馬県綿貫観音山古墳出土品」を常時展示する国宝展示室では、銅水瓶や金銅製馬具などのきらびやかな副葬品と優れた造形の埴輪群像を一堂に観ることができる。そのほか、原始・古代・中世・近世・近現代にいたる群馬県の歴史や文化の特色について紹介している。</p>
<p>群馬県立近代美術館（綿貫町992-1）</p> 	<p>昭和49年（1974）に開館。ルノワール、モネ、ピカソなど海外の近代美術から、日本の近現代美術、群馬ゆかりの美術など優れた作品を収集・展示しているほか、日本と中国の古美術を中心とした戸方庵井上コレクションも所蔵している。</p>
<p>群馬県立土屋文明記念文学館（保渡田町2000）</p> 	<p>県立の文学館。群馬の歌人・土屋文明の業績を顕彰するとともに、群馬県ゆかりの文学資料の収集・紹介や、企画展の開催など、文学に親しめるよう様々な事業を展開している。</p>
<p>群馬県立日本絹の里（金古町888-1）</p> 	<p>蚕糸絹業に関わる情報発信の拠点として、染織等の体験学習機能や、養蚕から絹織物まで親しむことのできる展示機能を備え、蚕糸業の振興に寄与している。</p>

③一般利用が盛んな主な歴史文化資産

市内には、整備等が進み、見学等の一般利用が盛んな史跡や建造物などの歴史文化資産がある。概要は下表のとおりである。

表1-5 一般利用が盛んな主な歴史文化資産

名称（所在地）	概要
<p>山上碑及び古墳（山名町2104）</p> 	<p>681年に建てられ、完存するものに限れば日本最古の石碑（国特別史跡、ユネスコ「世界の記憶」）で、放光寺の僧である長利が、亡き母の黒壳刀自を供養すると共に、母と自分の系譜を記している。碑の東隣にある山上古墳は7世紀に造られた直径15mの円墳で、黒壳刀自を追葬したものと考えられている。</p>
<p>多胡碑（吉井町池1095）</p> 	<p>711年に多胡郡が建郡されたことを記念して建てられた石碑（国特別史跡、ユネスコ「世界の記憶」）で、那須国造碑（栃木県）、多賀城碑（宮城県）と並ぶ日本三古碑の一つ。周囲は緑あふれる「いしぶみの里公園」として人々の憩いの場となっている。</p>
<p>金井沢碑（山名町金井沢2334）</p> 	<p>726年に三家氏を名乗る氏族が、当時の最も新しい文化である仏教思想によって先祖の供養、一族の繁栄を祈るために造立した石碑（国特別史跡、ユネスコ「世界の記憶」）。山上碑から金井沢碑までの間には、万葉和歌を詠んだ碑が建つ「石碑の路<sup>いしぶみ みち</sup>」がある。</p>
<p>日高遺跡公園（日高町31-2ほか）</p> 	<p>弥生時代後期の集落跡（国史跡）で、芝生ひろばなどの「多目的エリア」、弥生時代の水田を復元し稲作体験の場として活用できる「水田エリア」と、「環壕エリア」の一部が使用できる。また、多目的トイレや屋外体験施設も整備し、憩いの場としてだけでなく学びの場としても活用されている。</p>

名称（所在地）	概要
<p>上毛野はにわの里公園（保渡田町2000-1ほか）</p> 	<p>広さ12.9haの歴史公園。園内には、保渡田古墳群（国史跡）、かみつけの里博物館、群馬県立土屋文明記念文学館、土屋文明歌碑、山村暮鳥詩碑などがある。また、「はにわの里夏まつり」では花火が打ち上げられ、例年10月開催の「かみつけの里古墳まつり」では、古墳ガイドや勾玉づくりの体験イベント、「王の儀式」の再現劇の上演がある。</p>
<p>観音山古墳（綿貫町1752）</p> 	<p>観音山古墳（国史跡）は6世紀後半に築造と推定されており、群馬県教育委員会により史跡整備が行われ、県内初の史跡公園として昭和56年（1981）に公開された。出土品は「群馬県綿貫観音山古墳出土品」として令和2年（2020）9月に国宝に指定され、群馬県立歴史博物館に展示されている。</p>
<p>上野国分寺跡（東国分町・引間町・前橋市元総社町小見）</p> 	<p>天平13年（741）の「国分寺建立の詔」を受けて建てられた僧寺の跡（国史跡）で、群馬県教育委員会により金堂・塔の基壇や築垣が復元され、ガイダンス施設も設けられている。10月下旬頃には「上野国分寺まつり」が開催され、奈良時代の宮廷衣装をまとった行列や、雅楽の演奏会などが行われている。</p>
<p>北新波砦史跡公園（北新波町216）</p> 	<p>15世紀後半から16世紀中頃に築かれたと推定される砦跡（県史跡）。高崎市教育委員会により平成3年度（1991）・4年度（1992）に史跡整備され、現在は北新波<sup>きたあらなみとりで</sup>砦史跡公園として一般公開されている。</p>
<p>箕輪城跡（箕郷町東明屋638-1ほか）</p> 	<p>日本百名城にも選出されている平山城跡（国史跡）。敷地内には散策コースが設けられ、四季折々の自然を楽しむことができる。例年10月下旬に開催される「箕輪城まつり」では、甲冑などの装束をまとった出演者が、武者行列・鎮魂祭・箕輪城攻防戦を行う。</p>

名称（所在地）	概要
<p>旧下田邸書院及び庭園（箕郷町西明屋702-2）</p> 	<p>長野氏の重臣であった下田大膳正勝の子孫が箕輪城落城後この土地に土着し、代官として居を構えた屋敷跡（県重文）。広い敷地内に造営された風流な書院と庭園は、江戸時代後期の建築と造園の様式を知ることができる。紅葉時期の夜には、ライトアップも行われる。</p>
<p>榛名神社（榛名山町849）</p> 	<p>1400年以上の歴史を誇り、火の神と土の神を祀り、五穀豊穡、商売繁盛などのご利益があるといわれ、独特な奇岩に囲まれた境内は、神聖な空気が漂うパワースポットとして多くの人たちが訪れている。本社・幣殿・拝殿は文化3年（1806）に建てられた権現造の建物（国重文）で、御姿岩の前面に接して建てられた他に例を見ない珍しい建造物である。</p>
<p>上豊岡の茶屋本陣（上豊岡町133-12ほか）</p> 	<p>中山道の高崎宿と板鼻宿の間に設けられた、大名や上級武士・公卿の喫茶等に用いられた休憩施設（県史跡）で、宝暦7年（1757）には日光例幣使であった五条宰相菅原為成が、文久元年（1861）には皇女和宮御下向の際に公卿などが客人として立ち寄ったという記録が残る。江戸時代以降約250年にわたって飯野家によって維持されてきた。茶屋本陣の建物は、既にあった居住用の主屋（18世紀中頃築造）と接続する離れ座敷として19世紀初めに増築された。</p>

第1章 高崎市の概要



図1-21 歴史文化資産に関連する主な展示公開施設等の位置

①高崎市歴史民俗資料館	②観音塚考古資料館	③かみつけの里博物館
④榛名歴史民俗資料館	⑤吉井郷土資料館	⑥多胡碑記念館
⑦染料植物園	⑧高崎市美術館	⑨高崎市タワー美術館
⑩高崎市山田かまち美術館	⑪村上鬼城記念館	⑫群馬県立歴史博物館
⑬群馬県立近代美術館	⑭群馬県立土屋文明記念文学館	⑮群馬県立日本絹の里
⑯山上碑及び古墳	⑰多胡碑	⑱金井沢碑
⑲日高遺跡公園	⑳上毛野はにわの里公園	㉑観音山古墳
㉒上野国分寺跡	㉓北新波砦史跡公園	㉔箕輪城跡
㉕旧下田邸書院及び庭園	㉖榛名神社	㉗上豊岡の茶屋本陣

### 第3節 歴史的背景

#### (1) 原始

旧石器時代は、人類による石器（打製石器）の使用が始まった時代であり、この時代にアフリカ大陸で誕生した現生人類が日本列島に到達した。日本では3万8,000年前頃からの旧石器時代後期の遺跡が数多く確認され、高崎では榛名地域の白岩民部遺跡（白岩町）や吉井地域の折茂Ⅲ遺跡（吉井町長根）など丘陵部の遺跡が知られている。その他、やりさきがたせんとう き槍先形尖頭器が雨壺遺跡（大八木町）などで出土している。

縄文時代が始まる1万6,000年前頃から気候が温暖化し、植生などの環境が大きく変化した。その結果、土器や弓矢が普及し、人々は竪穴式住居の集落に定住するようになった。前期以降のムラの様子を知る遺跡として、山名柳沢遺跡（山名町）などが見ついている。中期には、自然環境の変化に適応しながらより大規模で長期間継続する集落を形成し、白川傘松遺跡（箕郷町白川）や高崎情報団地Ⅱ遺跡（中大類町）などで、大規模な環状集落が確認されている。中期後半から後期の遺跡は数が少なく、この時期に特徴的なえかがみがたしきいしじゅうきよ柄鏡形敷石住居は、長井石器時代住居跡（倉渕町権田）（県史跡）や若田原遺跡群（若田町）（県史跡）などが知られている。晩期の遺跡は、烏川沿いの低地部でわずかに確認されている。

弥生時代は大陸から伝わった稲作が普及し、新たに水田を切り開くことを試みた時代といえるが、前期から中期中葉は、上ノ久保遺跡（倉渕町権田）、神保富士塚遺跡（吉井町神保）など、山間部や台地に再葬墓の遺跡が点在している。この時期までは明確な水田の遺跡は見つかっていない。中期の後半になると高崎城遺跡（高松町）、高崎競馬場遺跡（岩押町）などで周りを壕で囲う環壕集落が出現した。人々は、今まで利用されなかった集落周辺の低地に進出し水田を切り拓いたが、これらの集落は長続きしなかった。後期になると、台地上に集落が展開するようになり、井野川などの支流が作った小さな谷や湧水を利用して水田が営まれた。日高遺跡（日高町ほか）（国史跡）は弥生時代後期の遺跡であり、発見当時は弥生時代の最北の水田跡として注目された。生産域である水田と居住域、墓域を3世紀の浅間山噴火による火山灰や軽石が覆っていた。当時のムラの様子を知る重要な遺跡である。



図1-22 日高遺跡の復元水田

#### (2) 古代

古墳時代に入ると、井野川中・下流域の広大な低地部に大規模な集落が広がり、墳丘長90mの大型前方後方墳である將軍塚古墳（元島名町）（市史跡）が築造された。その後、広大な低地を有する開発拠点であった倉賀野地域にせんげんやま浅間山古墳（倉賀野町）（国史跡）、おおつるまき大鶴巻古墳（倉賀野町）（国史跡）などの大型前方後円墳が、ヤマト王権との繋がりを背景に築造された。5世紀後半になると、3基の大型前方後円墳で構成される保渡田古墳群（保渡田町・井出町）を築造した首長たちが、榛名山の山麓域の開発を進めた。6世紀

以降も観音塚古墳（八幡町）（国史跡）、観音山古墳（綿貫町・台新田町）（国史跡）など、100m級の前方後円墳が築造され、様々な副葬品や埴輪が出土している。また、三ツ寺I遺跡（三ツ寺町）や、同時期のものとされる北谷遺跡（冷水町・引間町）（国史跡）を居館とした首長の存在に代表されるように、高崎地域はヤマト王権との繋がりや首長の積極的な対外交流による渡来人の先進的な技術の導入を背景に、古代の東国における政治と文化の重要地域として繁栄した。特筆すべきは馬の生産である。日本における馬の導入は、軍事・流通・運輸・農耕・儀礼などに大変革をもたらした。高崎地域では、<sup>けんぎきながとろにし</sup> 剣崎長瀬西遺跡（剣崎町）で5世紀の渡来系文物が出土するとともに、馬が埋葬された土坑が確認されるなど、東国でも早くから馬の生産が行われた地域であった。

5世紀末から6世紀にかけて榛名山が2回大噴火した。火砕流や土石流の発生、火山灰や軽石の降下で埋没した集落や農地では、当時の生活の痕跡を見ることができる。



図1-23 保渡田古墳群



図1-24 三ツ寺I遺跡推定復元模型

飛鳥から奈良時代前半にかけて、中央では仏教の教えも広まり、律令制による集権国家の形が次第に出来上がっていった。市の南部地域に所在している山上碑（山名町）（隣接する山上古墳とともに国特別史跡）・多胡碑（吉井町池）（国特別史跡）・金井沢碑（山名町）（国特別史跡）は上野三碑と呼ばれ、それぞれの碑文から仏教の思想が地方にまで広がっていたことやミヤケ（屯倉）と呼ばれるヤマト王権の直轄地の存在、建郡などによる地方行政制度のあり方、豪族の婚姻や氏族のつながりなどの詳細を知ることができる。多胡碑の南にある上野国多胡郡正倉跡（吉井町池）（国史跡）は、古代多胡郡の郡家跡で、郡内で徴収した稲などを収納した正倉院（倉庫群）である。遺跡の北端で確認された正倉は、格式の高い「法倉」であったと考えられ、当時の国家的政策により設置された多胡郡の歴史的特性を反映している。

天平13年（741）、聖武天皇は仏教の力で国を治めようと全国に国分僧寺・国分尼寺の造営を命じた。上野国分寺跡（東国分町・引間町・前橋市元総社町小見）（国史跡）は、政治の中心である国府（今の県庁にあたる）の推定地の北西に建てられた僧寺の跡である。国分僧寺は東西約220m、南北約235mの広さを持ち、周囲は築垣で囲まれていた。その中央には本尊を安置する金堂と、基壇が一辺19.2mの七重塔が建っており、全国で最も早い時期に完成した国分僧寺だと考えられている。寺からは県内各地の地名の入った瓦が出土し、多くの地域が関わって建てられたことがわかる。国分僧寺の東約500mには国分尼寺が、国分僧寺と東西に並ぶように建てられた。国分尼寺は国分僧寺とほぼ同

時期の8世紀半ばに建立されたとされ、尼が日常生活を送る宿舎である尼坊や回廊等が最近の発掘調査で確認されている。

平安時代になると、中央では藤原氏中心の貴族が政治をすすめ、その後、院政や平氏の政治を経ることになる。高崎のあった上野国は、全国68ヶ国の内上位13ヶ国が位置づけられた「大国」に格付けされ、さらには上総・常陸とともに親王が太守に任じられる親王任国となるなど、中央政府にとって重要な国の一つであった。律令制度が崩れていくと地方では荘園ができ、それらの土地を守るために武士が登場する。八幡八幡宮が所在する片岡郡には八幡荘が設立され、上野国における清和源氏一族の拠点形成した。

### (3) 中世

治承4年(1180)、平氏打倒のために源頼朝が伊豆で挙兵し、その後関東地方を勢力下においた。源氏の一族で新田荘(太田市ほか)に本拠を置く新田義重の子で、市内の山名を本拠とした山名義範はいち早く頼朝に従い、上野国の御家人として重く用いられた。その後拠点を西国に移した山名氏は、室町時代には全国66ヶ国のうち中国地方を中心とした11ヶ国を守護領国としたことから「六分の一殿」と呼ばれるほど勢力を拡大した。市域では他に、新田氏一族の里見氏も活躍した。

鎌倉に幕府が開かれると上野国では安達氏が守護となり、その後執権の北条氏が守護に任じられた。また、鎌倉を中心に東国の各地を結ぶ新たな道路網が整備され、幕府の御家人たちは有事の際には「いざ鎌倉」とその道を馳せ参じた。高崎は鎌倉から信濃へ向かう「鎌倉街道上道」と、東北地方へ向かう奥大道と連絡する「あずま道」とが八幡町付近で分岐するため、鎌倉から関東諸国を通して信濃や越後、陸奥へとアクセスできる交通の要衝となった。

中世の社会には平安時代後期からの末法思想の浸透と戦乱による社会不安があり、現世の人々は安穩と来世の救いを神仏に求めた。その結果、仏や菩薩が人々を救済するために、神の姿を借りてこの世に現れるという神仏を習合した思想(本地垂迹)が浸透し、神社の本殿内に仏を本地仏として安置することが始まった。高崎では、榛名神社(榛名山町)(国重要文化財)などに神仏習合の早い例が認められ、神社を守護する寺が境内に建立された。榛名神社はそうしたことから榛名寺や巖殿寺・満行権現などと呼ばれた。

鎌倉幕府の滅亡後、後醍醐天皇による建武の新政では鎌倉攻めの功績により新田義貞が上野国の守護となった。南北朝の動乱で足利尊氏によって平定された後は、上杉氏(後の関東管領)が守護、長尾氏が守護代となった。南北朝の動乱に始まり、その後戦国時代にかけて、各所には城郭が築かれた。岩野谷丘陵(観音山丘陵)周辺には寺尾上城(乗附町)、寺尾中城(寺尾町)、茶臼山城(城山町)、根小屋城(山名町)、山名城(山名町)(市史跡)、木部城(木部町)が、烏川対岸の平野部には和田城(高松町)、倉賀野城(倉賀野町)が築かれており、有力な大名の重要な拠点となった。

戦国時代になり、上杉氏の支配体制が次第に弱まると、上野国では地域ごとに有力な武将が立った。浜川周辺に勢力をもち、北新波砦跡(北新波町)(県史跡)など多くの砦や館を築き、地域の武士団をまとめていった長野氏は、鷹留城(下室田町)(市史跡)を築城し、さらに榛名白川や榛名沼などの自然の地形を巧みに利用して箕輪城(箕郷町西明屋・

箕郷町東明屋) (国史跡) を築いた。<sup>ながのなりまさ</sup>長野業政 (業正) は優れた武将として知られ、甲斐の武田信玄など他国勢力の侵攻を防いでいた。しかし、業政 (業正) が没し、子の<sup>なりもり</sup>業盛 (氏業) が家督を継ぐと武田信玄の西上野への侵攻が本格化した。長野氏は箕輪城を本拠にして最後まで抵抗したが、永禄9年 (1566) に箕輪城は落とされた。その後箕輪城は、武田氏・織田氏・北条氏・徳川氏が次々と治め、その中の有力な家臣が城主となり、最後の城主井伊直政が慶長3年 (1598) に和田の地を高崎と命名して城を移し、廃城となるまで西上野の重要な拠点であった。



図1-25 箕輪城跡・郭馬出西虎口門



図1-26 高崎城址 (三の丸外圍の土居と堀)

#### (4) 近世

関ヶ原の戦いで石田三成に勝利した徳川家康は江戸に幕府を開き、幕藩体制が確立した。高崎には高崎藩・吉井藩・上里見藩が置かれた。

高崎藩では箕輪城から城を移した井伊直政をはじめとして、酒井家、松平 (戸田) 家、松平 (藤井) 家、安藤家、間部家、松平 (大河内) 家といった譜代の大名が藩主となった。その中には、松平 (大河内) <sup>てるさだ まなべあきふさ</sup>輝貞、間部詮房、松平 (大河内) <sup>てるたか</sup>輝高のように老中や側用人、京都所司代や大阪城代などの幕府の要職を務めた藩主もいた。そのうち松平 (大河内) 家は、元禄8年 (1695) に輝貞が封ぜられてから<sup>てるな</sup>輝声が版籍を奉還するまでの10代、約170年間の藩主であった。



図1-27 高崎城乾櫓

吉井藩は上野国・上総国に領地をもち、宝暦年間からは吉井陣屋 (陣屋の表門は市重文) に藩庁を置き、藩主は江戸に常住した。第9代藩主<sup>のぶおき</sup>の松平信発は、幕末名君の一人といわれている。

上里見藩は、寛延元年 (1748) に松平 (奥平) <sup>ただつね</sup>忠恒の移封に伴って立藩した藩である。陣屋は上里見村の神山に置かれ、忠恒は若年寄となるなど幕政を支えた。明和4年 (1767) に忠恒が甘楽郡小幡に移封され、上里見藩は廃藩となった。

江戸時代には、江戸を中心とした交通網が新たに整備され、それに伴って宿場町や舟か

ら人や荷物をあげおろしする河岸<sup>かし</sup>などが発達した。中山道は五街道の一つとして慶長7年（1602）頃から整備が始まり、上野国には、新町・倉賀野・高崎・板鼻・安中・松井田・坂本の7宿があった。さらに倉賀野宿を起点に、中山道と分岐して日光に至る日光例幣使道、高崎宿を起点に中山道と分岐して越後に至る三国街道といった脇街道が整備された。

水上交通としては、利根川最上流の倉賀野河岸が整備された。その結果、高崎は江戸時代を通じて水陸の物流の結節点であった。

古来、榛名山の裾野一帯をはじめ、烏川の北東岸の高崎台地、そして井野川の北東岸の前橋台地の各地域では、水を引き入れることに苦勞しており、田畑を開墾することが難しかった。そのため、長野堰用水など、古くから用水の開墾<sup>かいさく</sup>が行われてきた。江戸時代初期の幕府の代官伊奈備前守忠次は、天狗岩用水開墾事業に参加した江原源左衛門<sup>えはらげんざえもん</sup>らの協力を得て、台地上に立地して水をを得ることに苦勞する滝村や玉村への用水の延伸と新田開発に尽力した。近くを流れる井野川や利根川などは滝村からみて低い位置にあったため、より上流の先にできていた天狗岩用水から取水した。滝川用水の完成によって、滝村から玉村地区までの水田は潤った。

江戸時代中期以降、街道が整備されたことや比較的平和で安定した時代が続いたことなどから、「お伊勢参り」や「富士講」などの信仰と観光を兼ねた旅が流行する。榛名神社も、関東全域をはじめ信濃（長野県）、越後（新潟県）、甲斐（山梨県）などから「榛名講」の参拝客が訪れるようになった。「講」とは旅費の積み立てを行う仕組みで、年に一回、代表が神社へ参拝に行く「代参」が行われていた。

交通の要衝であった高崎では様々な文化交流が行われ、和歌や狂歌が隆盛した。また、武士の教育機関として各藩につくられた藩校や、人々の教育施設である寺子屋などによって、学問や教育も普及した。高崎藩には遊芸館や文武館が藩校として開校し、吉井藩にも学問所（のちの教学館）が設立された。寺子屋は、近世の日本の文化水準を根幹で支えたもので、「読み書きそろばん」を身につける場であり、漢籍や算術（和算）を教えるところもあった。和算を学んだ人たちの中には、和算修得の祈願や成就の感謝のために数学の問題と答えや解法を記して額や絵馬を神社仏閣に奉納する人もおり、高崎では「八幡八幡宮の算額」（県重要文化財）や「関流算額文化八年銘」（県重要文化財）などが現存している。

安定した時代が続く江戸時代ではあったが、1780年代には天候不順や浅間山の噴火、天明の大飢饉が起り、大きな社会不安に見舞われた。「高崎だるま<sup>®</sup>」はこの頃、農閑期の副業として張り子のだるまを作ったのが始まりといわれている。また、近世初頭から上野<sup>こうずけ</sup>で行われていた養蚕の普及によって、元禄前後の頃から真綿・絹・糸などが商品として広く生産された。そうした養蚕の普及に対して、幕府代官はもちろんのこと、諸藩も強い関心を持ち、さまざまな対応を示した。吉井藩では、天明8年（1788）4月に領内に対し養蚕や植林の奨励に関する布達を出している。そのような領主の養蚕奨励策もあり、18世紀半ば以降、養蚕はほとんどの農民にとって欠かすことのできない現金収入源となった。こうした中、高崎を含め西上野では、家内制手工業として各農家が養蚕から一貫して絹を織るという生産方式が、幕末に至るまで行われていた。織物業が盛んになると、染物の技術も発達していった。

嘉永6年（1853）、アメリカの東インド艦隊司令長官ペリーの来航以降、日本は

幕末の動乱期を迎えることになる。文久元年（1861）の皇女和宮の御下向の際には中山道が使われ、京から江戸へ向かう行列が高崎を通行した。元治元年（1864）には天狗党（尊王攘夷の急進派）と高崎藩の部隊が戦った下仁田戦争が起こった。また、勘定奉行など幕府の要職を歴任し、横須賀製鉄所の設立をはじめとして日本の近代化に多くの面で貢献したことで「明治の父」と称される小栗上野介忠順おぐりこうずけのすけただまさの最期の地は倉淵地域であった。このように、幕末の歴史においても高崎は重要な舞台となっている。



図1-28 小栗上野介忠順終焉の地

### （5）近代

明治時代に入ると、政府によって近代化に向けた政策が推し進められ、高崎でも官制改革、交通網の整備、近代産業の育成等が進められた。

近代化以降、高崎の経済を発展させてきた生絹・太織ふとおりの起源は、元禄3年（1690）に田町に絹市場が開設されたことに始まる。高崎の農家では自家で養蚕を行い、上繭は販売に回し、残った下等繭や玉繭から女性と子どもが座繰りざくり器械で糸を採り、それを原料にして製織した。農家の女性と子どもが製織し、副業として生産が維持されたところに高崎生絹の大きな特色があった。生絹・太織の生産は高崎市内の養蚕農家だけではなく、群馬・碓氷・多野・北甘楽の4郡や、埼玉県北部の上武地方など広範な地域で行われ、製品は商人の手で高崎に集荷され、「高崎絹」の名称で東京や京阪地方に販売された。生絹の取引市場は藤岡・吉井・新町・安中・金古にあり、これらの市場の中心であった高崎絹市場は、明治27年（1894）11月に田町に売買市場が建設され、固定市場となった。



図1-29 旧新町紡績所工場本館

横浜開港によって生糸輸出が盛んになったが、生糸を採る段階で多くの屑や屑糸が発生した。ヨーロッパには屑糸を加工し、絹糸として製品化する屑糸紡績の技術があり、この技術を日本でも活用すべきという考えのもと、屑糸紡績工場が高崎の新町に建設された。明治10年（1877）10月に操業を始め、開業式には大久保利通・大隈重信・伊藤博文ら政府高官が顔をそろえ、翌年9月には明治天皇が「北陸東海御巡幸」の際に行幸した。政府にとって、この工場がいかに重要であったことかを窺い知ることができる。

生糸や織物などの在来産業のほかに、城下町を中心として地域的需要に支えられて発展してきた産業に染色業がある。織物業が盛んになると染物の技術も発達し、「高崎に来れば、

染物の仕事はだいたい間に合う」といわれるほど高崎には染物に関わる職人や商人が揃っていた。

富国強兵政策を進めた明治政府にとって、交通の要衝である高崎は軍事上の重要地点でもあり、高崎城址を陸軍省の管轄下に置いた。明治6年（1873）に東京に鎮台が置かれると、その分営が高崎城址に置かれ、その分営は独立して歩兵第15連隊となった。また、岩鼻火薬製造所（岩鼻町・八幡原町）は日本陸軍唯一のダイナマイト製造の工場であった。明治39年（1906）に生産を開始してから大正6年（1917）に民間の日本火薬製造（株）が生産をはじめると、日本で唯一のダイナマイト製造所であり、大正10年（1921）までは製造額日本一を誇っていた。その他、大正13年（1924）から砲弾に使う黒色火薬、昭和9年（1934）から銃弾などに使う無煙火薬の製造を始めた。昭和20年（1945）には工場敷地325,000坪、従業員3,956人で3種類の火薬を造り続けた。戦後の昭和49年（1974）、火薬製造所敷地の中央部に都市公園「群馬の森」が開設され、同年に群馬県立美術館が、昭和54年（1979）には美術館に隣接して群馬県立歴史博物館が開館した。

明治16年（1883）12月に新町駅が開業した。明治17年（1884）5月には新町駅・高崎駅間の鉄道が開業し、上野駅・高崎駅間に現在の高崎線が全線開通した。高崎駅を起点に鉄道路線が伸び、明治10年（1877）10月に北高崎駅、明治27年（1894）5月に倉賀野駅、大正13年（1924）10月に群馬八幡駅が開業した。明治30年（1897）には高崎と下仁田間を繋ぐ上野鉄道（のちの上信電鉄）が開業し、さらには高崎線・上越線・両毛線・信越本線などの電化と複線化が進んだ。

近代化が進むと、高崎に上水道を求める声が年毎に高まった。明治33年（1900）4月1日、高崎は市制を施行し初代の市長には矢島八郎が就任した。矢島市長は本格的な上水道の建設にとりかかり、榛名地区の春日堰から烏川の水をとって剣崎の浄水場まで引き、落差を利用し給水することにした。明治43年（1910）工事が完成し通水した。全国でも早い上水道の完成となった。

昭和11年（1936）、岩野谷丘陵（観音山丘陵）に高さ41.8m、重さ5,985t、手に持った巻物の長さ4.5m、親指の太さが40cmの高崎白衣大観音像（石原町）（国登録有形文化財）が、実業家の井上保三郎<sup>やすさぶろう</sup>によって観光都市高崎の建設・歩兵第15連隊の慰霊・社会の平安などを祈願して建立された。胎内巡りができ、最上階の9階からは上毛三山や浅間山、日光連山や筑波山などを遠望することができる。

保三郎の長男・房一郎<sup>ふさいちろう</sup>は、ドイツの建築・工芸家ブルーノ・タウトを洗心亭（鼻高町）（県史跡）に招いた。タウトは昭和9年（1934）から2年3ヶ月もの間洗心亭で過ごし、並榎町の群馬県工業試験場において竹工芸など新しい時代にあった高崎の工芸を作る努力をし、一方で日本建築や日本文化の素晴らしさを世界に発表した。



図1-30 高崎白衣大観音像

村上鬼城は、著名な俳人であった高浜虚子に「この地に俳人、村上鬼城の在ることを諸氏は誇るべしである」と称されるほどの俳人で、鬼城の文業と人となりを永く後世に伝え顕彰するために、「村上鬼城顕彰小中学生俳句大会」が現在も開催されている。



図1-31 洗心亭

## (6) 現代

昭和20年(1945)11月、後の群馬交響楽団である高崎市民オーケストラが創設された。平成2年(1990)に始まった高崎音楽祭で使われた「音楽のあるまち高崎」のフレーズに代表されるように、音楽は戦後平和都市として歩む高崎の象徴となっていく。昭和36年(1961)には建築家のアントニン・レーモンドによって設計された群馬音楽センターが開館し、群馬交響楽団の本拠地として様々な催しが行われた。また、画家の山口薫が昭和33年(1958)の第2回グッゲンハイム賞国内賞などを受賞し、昭和61年(1986)にはアララギ派の歌人であり、万葉集の研究者としても活躍した土屋文明が文化勲章を受章した。昭和35年(1960)に高崎市に生まれた山田かまちは、幼少期から絵を描いたり詩や物語を書いたりすることに独創性を発揮し、17歳で夭折した後もその作品は多くの人に衝撃を与えた。その他、文化芸術の面において高崎にゆかりのある人物が国内外で活躍した。



図1-32 群馬音楽センター

高速交通が発達すると、高崎の交通拠点都市としての役割がより一層高まった。昭和32年(1957)12月に井野駅、平成16年(2004)10月に高崎問屋町駅が開業した。さらに、昭和57年(1982)に上越新幹線の大宮・新潟間が開通し、高崎に新幹線がやってきた。後に東京駅まで延伸し、高崎から50分余りで都心に行けるようになった。北陸新幹線は、平成9年(1997)に高崎・長野間が長野新幹線の愛称で部分開業し、平成27年(2015)には金沢、令和6年(2024)には敦賀まで延伸し、日本海側との交流がより盛んになった。

昭和55年(1980)7月に関越自動車道の前橋IC以南が開通し、高崎ICが開業した。その後、昭和60年(1985)には、新潟まで全線開通している。平成5年(1993)に上信越自動車道の藤岡IC・佐久IC間が開通、その間には吉井ICが開業した。さらに、新潟方面へ延伸したことで、藤岡JCTを介しての長野・新潟方面への利便性が高まった。また、高崎JCTを起点とする北関東自動車道の高崎JCT・伊勢崎IC間が平成13年(2001)に開通、さらに栃木・茨城方面へ延伸したことで高崎から北関東の太平洋側方面や東北へのアクセスがより一層容易になった。さらに、平成26年(2014)2月

昭和55年(1980)7月に関越自動車道の前橋IC以南が開通し、高崎ICが開業した。その後、昭和60年(1985)には、新潟まで全線開通している。平成5年(1993)に上信越自動車道の藤岡IC・佐久IC間が開通、その間には吉井ICが開業した。さらに、新潟方面へ延伸したことで、藤岡JCTを介しての長野・新潟方面への利便性が高まった。また、高崎JCTを起点とする北関東自動車道の高崎JCT・伊勢崎IC間が平成13年(2001)に開通、さらに栃木・茨城方面へ延伸したことで高崎から北関東の太平洋側方面や東北へのアクセスがより一層容易になった。さらに、平成26年(2014)2月

に関越自動車道高崎JCTと藤岡JCTの間に高崎玉村スマートICが開業した。高崎都心部と新幹線、高速道路が一体となった利便性により、周辺に高崎スマートIC産業団地が造成され、多くの企業が進出を希望した。

平成29年(2017)には国際レベルの設備水準をもつ高崎アリーナが開館し、スポーツイベントやコンサートに利用されている。令和元年(2019)には、国内最高水準の音質と設備を備える高崎芸術劇場が開館し、新たな群馬交響楽団の拠点として機能を発揮するとともに、国際的なアーティストによる公演が観客を集めている。

平成18年(2006)1月までの市町村合併で人口は30万人を越え、高崎は中核市に位置付けられた。商業都市高崎は、工業団地の造成、高崎駅周辺の再開発を通して県内随一の拠点都市となり、交通網をさらに発達させて今日に至っている。



図1-33 高崎駅西口



図1-34 高崎市役所本庁舎